



4月17日、五代目文枝夫人の長谷川君枝さん(我らの君枝おかあちゃん)が96才で、天に召されました。20年前に旅立ったおやっさんが、うれしそうに迎えて下さったでしょう。お世話になりました。心から感謝を込めて、ご冥福念じあげます。合掌



上方落語ツアと感謝デー

いちもん新聞

発行
いちもん新聞編集部
〒630-0246 生駒市西松ヶ丘8-8
「いこまのためき小屋」内
(有)文福らくごプロモーション
TEL・FAX 0743-73-6663
桂 文 福
ホームページ 文福部屋
YouTube「ためき小屋から福もろ亭」
令和7年5月 第129号



市川由紀乃
コンサート
11月1日



桂米朝が
遺した
宝もの

「お父さんといふ物語です」
「お父さんといふ物語です」
「お父さんといふ物語です」

生誕百年、十年祭

講文社

ざこば師の愛弟子
三人衆おめでとう

○襲名披露おめでたいはずが…

前号でおめでたい記事として、枝光改め四代目梅枝、三風改め五代目慶枝のダブル襲名の事をとりあげ、表紙に写真も出しました。昨年九月二十七日のなんばグランド花月（NGK）をかわきりに、半年かけて全国ツアー。今号もそのようを、ご報告と思っておりますが…。

まあなんと、襲名披露中、梅枝が飲酒運転、すべての公演が中止に。彼はかつて、北の大地に上方落語の種をまき、見事花を咲かせた事は、落語ファンならごぞんじの事。札幌公演（梅枝の単独襲名披露）で、米团治師、江戸からは柳家喬太郎師、桂宮治師をゲストに迎え、大入満員、すすきのの街で楽しく打ちあげをして、ゲスト陣らは、徒歩でホテルへ。その後、札幌在住の梅枝は、代行車が中々来なかったため、自身の車で駐車場を出た所、停車していた車にあてたので、警察官が来て調べられたところ、アルコールが検出され、その場で御用。

ああ、情けない。105年ぶりの襲名。歴代の梅枝師にも失礼。福岡、広島、東京など、キャンセルになって各方面にもめいわくをかけ、気の毒なのは、とばかりの慶枝。仕切直しの公演を、師匠、六代文枝が、吉本興業などに働きかけ、必らず慶枝の公演は実現するであろうが、梅枝は、しばらくは猛省の日々……。

あとは、かつて北海道で单身、開拓団のように、一途に、落語道に精進した日々を、思い出し、少しづつ信頼をとりもどしてがんばってほしいと願う。

○文鹿、第二の人生へ

前号で、「文鹿三十周年記念笑相撲」のご報告をして、奈良の相撲発祥の地、当麻（たいま）の「相撲館」で開いた落語会と嘶家相撲大会大盛況とお伝えした後、文鹿は、落語家引退を発表。文福門下二番弟子の「ちゃん好」から「文鹿」となり彼いわく「三十年間やりきった。やりたい事やつてはならない事、すべてやりつくした」彼は元プロボクサー。「あしたのジョー」のように、燃えつきたか……。とにかくストイック、毎年インドに一月こもって、新作落語を二十席ほど作り、東京の「落語カフェ」で、一年間毎月四席づつ演じるため、「四十八席」のネタをチラシに出して発表「何だ。こいつは？」と江戸の嘶家のどきもをぬいたり、門戸寄席や「中山寺寄席」「伊賀上野しようもん亭」等各地に地域寄席を根付かせた。今後は、ふるさと奈良の観光のために、ちがう自分の力を發揮するという。

高座をはなれても、一門の絆は変わらずアドバイザーとして付き合う。今後は彼がしいたルールを、まじめに、まっすぐ白鹿、鹿

えもん、雪鹿の三匹の子鹿は歩んで行くだろう。

○花形落語家フェスティバル

東京のように、真打制度がない上方は襲名、改名などの披露以外、黒紋付姿で口上をのべて、もらう事はない。そこで、繁昌亭や喜楽館があるので、入門十五年の者に「翔ぶトリウィーク」と題して、一週間、昼席でトリをとらせ、口上に、師匠方、兄弟弟子、仲間達に並んでもらう。文福門下五番弟子の「和歌ぼん」もなかやりきった。毎年十五周年を迎える若手には、楽しみがあるが、十六年目からの者にはそのチャンスがない。そこで、四月一日から五月一日までの一か月間「花形落語家フェスティバル」を開催。十六年目から二十五年目までの中堅が、日替わりでトリをつとめた。一門からはまめだ、三幸、三四郎、ぼんぼ娘、ちきんが、がんばった。

○三人襲名めでたし!!

人間国宝桂米朝師匠の生誕百年、没後十年の節目に、ごこば門下のひろば、ちようば、そうばの三人が、同時襲名をした。ひろば改め力造師、ちようば改め米之助師、そうば改め惣兵衛師。誠におめでとうございます。力造、惣兵

衛の先代は、はるか昔の方だが、米之助の名跡は、ものすごく身近でなつかしい。今から50年前、大阪市の若江岩田で、先代米之助師が地域寄席の草分け「岩田寄席」を主宰。故、米太郎、故、松葉（七代目笑福亭松鶴）、現役の米輔、春若、南光、文福は米之助道場の「岩田門下生」米之助師は「ものしりの甚兵衛はん」のごとく米朝師は、「わからん事あったら悦ちゃんに聞きや」悦ちゃんとは矢倉悦夫の本名からの愛称で、若手達も「悦ちゃん師匠」と呼ばせてもらっていた。サンケイホールブリーゼの高座で「めくり」が「米之助」に変わった瞬間、涙がこぼれそうになった。

極楽寄席のうちあげで、米朝師や枝雀師そして三人の師匠のごこば師、もちろん先代米之助師らは、盟友、六代目松鶴師、三代目春団治師、そしてうちのおやじ（五代目文枝）らと、「おめでとさん!!がんばりや」と、うれしいお酒を飲んでることだろう。

まめだの無口なためき

最近ドラマを見ていない。NHK朝ドラは好きでよく見ていたが今放送のあんばんは見れていない。大河ドラマべらぼうも見たいと思いつながら見れていない。録画も落語番組でいっぱいになり録画できない。なんとか少しづつ見ながら整理していきたい。そんな中

4月からのドラマが面白そうだ。なんで私が神説教、広瀬アリス主演土曜21時「ドクターアシユラ」、松本若菜主演水曜22時「等他もいろいろ見てみたい。すばらしいドラマと掛けて良いお店と解くその心」はどちらもテンポがいいです。

白鹿のはくはくしかじか

昨年2024年は、結婚し子供ができ、師匠文鹿が引退と、目まぐるしい一年でした。師匠から、いくつか落語会を引き継ぎましたが、その内の一つ、京都のあるお寺さんで落語をした際、お客さんから「文鹿さんにめっちゃ似てるな!」と言われた。「えっ……」師匠と私の落語、そない似てますか?「ちやうちやう、顔がそっくりや。息子さんかいな?」なんやねん。心に深い傷を負いました。

文喬のぶんきょうチック

この原稿を書いているのが四月一九日。私の師匠、五代目文枝の奥様の本葬の日です。奥さんにはいろいろとお世話になりました。料理上手な方で弟子入りして年季が明ける三年間、朝昼晩の食事が楽しみやった。師匠のお子さんの勉強を週二回教えていました。とりわけ、勉強を教えた日の晩御飯のおかげが格別によかった。

落語家になって二年目に富山の北日本放送でのレギュラーをいただいた。日曜日のお昼の生放送なので、当日の特急では間に合わない。前日の夕方、大阪を出発して富山に夜の十一時に着くんです。めっちゃ腹が減る。弁当を買おうお金がなかった。そんなことを百も承知の奥さんは必ず弁当を持たせてくれた。レギュラーの三年間、一回も欠かさず作ってくれました。特急の中でその弁当を食べるのが至福の時間でした。

私だけではないのですが、弟子が何回も失敗して師匠が爆発しそうになる前に「あんた気いつけや、もう一回とちったら、お父ちゃん、爆発するで」とこっさり教えてくれました。本当にええ奥さんやったな。

奥さん、天国でも楽しんでくださいね。

ご冥福をお祈りします。 合掌

枝女太の「和」のころ

前回に続き言葉の話しその二

放送禁止用語というものがあります。差別的な言葉を放送では使わないようにしようという放送局も含めた情報の発信者側全体の自主規制です。私も若い頃よく注意されました。とくに身体の不自由な方への差別的な言葉には気をつけると言われました。「めくら」「つんぼ」「おし」等絶対に使えなかった。

ところが最近「おし」という言葉がテレビでも頻繁に使われております。勿論意味は違います。応援するという意味の「推し」です。

初めて聞いたときはびっくりしました。ひと昔前までは意味は違っても音が同じだとダメだと謂われてました。「かたておち」などがええ例で、片手が落ちてるんやない、片方が手落ちになつてるという意味やと言うても音が同じなんであかんと。それを思うと隔世の感がございますが、これも「唾（おし）」という言葉がほぼ死語になつてきたということなんでしょうかね。

文太のむかし噺 急・江戸荒物

(その三)

喜伊さんは
江戸っ子弁の
荒物屋を
始めた。

次にやって来たのが

「ごめんよ」

「ホンマもんの
江戸っ子や」

「このたわし、
いくらだい」

「いくらでも、
かまいません」

「十銭置いて
三つばかり

もらっていくよ。
あばよ」

「えらい損やがな」

◇

「はあーい
ちよつくら

おいずし（お許し）」

「田舎もんやなあ。

なんでーも 売りまーす」

「そうかいの。

ほんならのう、
ペラペラペラペラ…」

「売りまーす」

「じゃあ五十銭でのう」

喜伊さん、

店を五十銭で

売ってしまひよった。

(了)

文昇問題 その一

運転免許証は、金、青、緑と三種類の色がある。先月運転中に、一旦停止をしなかった事で、警官にとめられた。

そこは、電柱の蔭で、見張っていることで有名ならしい。警官に切符をきられている私の横を何台もの車が、一旦停止せず通り過ぎて行く。サバンナで、優雅にくつろいでいる草食動物達のそばで、ライオンに喰われているシマウマの気持が少しわかった。たしかに悪い。徐行で交差点に進み、完全に停止しなかった。私がしゃくにさわるのは、これから、罪を犯そうとするのを止めるのが、本来の職務ではないのか。万引きしようとしている少年がいる。店員に見つ

かる前に、諭して改心させる。ところが、電柱の陰に違反者が来るまで隠れ獲物が来るなり捕まえる。確かに悪い。でも、何かすつきりしない。免許証の更新まであと、五ヶ月だった。4年間無事故無違反のゴールド免許だったが、今後の私は免許証も心もブルーになった。

「あやめの女王様とお呼び」

またコケました！去年滑ってコケて手首骨折して、まだプレート入つてるといふのに。お花見の帰り、つんのめって見事に顔から落ちました。痛あ！と思つたけど皆から「大丈夫？」で心配されて恥ずかしいし「大丈夫、大丈夫」と家に帰りました。

朝起きたら娘が「お母さん顔！」と叫ぶので鏡を見たら左目の周りが、マンガでパンチを喰らった人みたいに紫色になつてゐるのです！数日後に仕事があったのですが、なかなか青タンは引きません。濃いめにドーランを塗つても隠れず…逆転の発想でいく事にしました。反対側の目の周りをアイシヤドゥで囲むのです。

その日は内海英華さん、めぐまりこさんと3人で組んでるトリオ漫才オジョウサンズの舞台で、2人とも化粧が濃いので不自然やないのでした！で、次の日の仕事は染雀さんと組んでる芸者音曲漫才・姉様キングス。白塗りにする

から問題なし！

落語以外の余芸をやつてよかったーと思うツラの皮の厚い私です。

坊枝の新婚日記

自宅から数百メートルのところに笑福亭の重鎮の師匠が単身で移つて来られてちょうど一年になる。大したこともしていないのに時々「今晚あいてるん？ちよつと行こうか、よかつたら奥さんも」とお声がけをいただく。さすがに今夏で七十五歳になられるので以前より早く酔われるようになったと思う。

席でお勘定を済ませて下さり「兄さん、そろそろ行きましようか」「はい今さつき」「兄さん、そろそろ行きましようか」「俺、カネ払うたかな」「はい今さつき」この会話を四回繰り返してお別れしたあと妻に「ああ面白かった、久しぶりに『住吉駕籠』演つたら」と言われた。

楽珍の“警備員”日記

「アホかあ！ボケー！何さらしとんじやい！！もう少しでおのれ、轢き○す所やないかい！！」トラックの運転手がもの凄いい顔で、メチャクチャ怒っている。当然である。阪神高速の道路上

で△中野のじいさんが△コーンを取りに行く為に、私の忠告を無視して、「だいじょうぶだいじょうぶ。」と言いながら、強引に道路を横切った。

寸前の所で止った運転手が、さらに怒る⑤

「アホかあ!! 高速横切るジジイがどこにおんねやあ〜!!」

ところが怒鳴られた中野のじいさんも、負けてない。びっくりするような、返しをしてくれた。

「ア……ア……アホかあボケ〜!! 歩行者優先やないかい〜!!」……。一同、啞然とした。

(中野のじいさん、こんなに天然だったのかあ……)と私。

おまけにトラック荷台の小豚たちが、プヒプヒ鳴きながら、道路上へ出て来た。

私は生まれて初めて、小豚を抱っこして、荷台へ戻した。(落語家の仕事やないな……)

帰りのバスの中、班長の私が、「中野さん、規則は絶対守って下さいよ!! 高速道路、横切ってはダメですよ!」ときつく説教した。

反省してるかと思いきや、「いやあ〜しかし班長〜!! 今日はおのトラックの運転手、プヒプヒ言わしたったなあ〜!! アハハハハ〜」とご機嫌だった。

(もちろん、誰も笑わなかったが、私はこの人にくめないなあ……)と思った⑥

「枝曾丸のつれもていころ」

知り合いのお爺さんより、今では50年以上も前のありえない思い出を聞きました。東京での大学生活が決まり上京して、入学届を提出した時にハプニングが! なんと認印を押していなかった事に気づきました。ハンコなんか今では百均で買うことも出来るし、手軽に作ってもらう店もあるがなんせ50年以上も前。機転を利かせて、電話帳で同じ苗字の人を探してハンコを借りようと考えた。少ないが4軒あった。居る場所から、一番近いお宅に電話をしたところ快諾。何うと大きなお屋敷。家政婦さんに立派な応接間に通され、しばらくすると、上品な婦人がハンコを持って来て押してくれた。その時に、出されたカップに、ティーバックの紅茶。こんなのみたことない! 「どないして飲む?」……考えた末、袋を破いて中の茶葉を摘まんで口に入れたところ応接間が笑い声に包まれたという。実に微笑ましい出来事でしょう。このあつたかい空気が落語になるんですよ。

ぼんぼ娘ピーのポンポコナー

子供の頃に、大好きだったイベントのひとつに、誕生日会がある。クリスマスと並んで、ケーキが食べられる特別な日だからだ。それが、いつからか? 誕生日があら

まり楽しみでなくなってきた。なにも成長しないまま、年だけ重ねて体だけ老いていく。思い描いていた理想とはかけ離れた現実が、つらすぎて、年年、自己嫌悪でうつうつとした気持ちで塞ぎ込んでしまう。本当に情けない。

その点、うちの師匠は素晴らしい。毎年、三月は、大阪場所忙しいのにかかわらず、今年は自身の誕生日である三月三十一日に落語会を開き、強制的にお客さまにも自身の誕生日を祝わせる。年を重ねて成長するどころか人間として退化して、まわりに気遣いをするのではなく、気をつかわせる。本当に素晴らしい師匠だ。ただ修業の足りない私は、師匠にはもう少し大人になってほしいと願っている。

文福の ой やんストーリー

今年、昭和百年、戦後八十年、阪神淡路大震災三十年と節目の年。そして私事ですが、六回目の当たり年。何か記念の催しをと三月三十一日の72才の誕生日に繁昌亭にて「恩返し寄席」を開催。おかげさんで満員御礼、感謝!! 幕明きは、奈良の「けはや相撲甚句会」の皆さんが八人も並び、ええ声をひびかせました。鹿えもん。ぼんぼ娘の落語があり、特別ゲスト、人情噺の名人、四代目桂福団治師匠、私は一門のわくを越えて兄弟分の盃をかわして頂いてい

に、54年目の噺家。今や、すっかり吃音は、コ、コ、コクフクしてまへんわ〜チャンチャン。

編集後記

この号は、八月末まで各地でご笑読頂けます。さて、私の故郷は紀の川平野の桃源郷の紀の川市の桃山町。かつての安楽川村で「あら川の桃」の名産地。その桃山町が、那賀郡の五町と合併して「紀の川市」となり二十年の節目に、大相撲春巡業「紀の川場所」が行なわれ、私も砂かぶりに……。一目十万本。桃の花が満開の市民体育館前には、力士幟がはためき、大入り満員。その土俵で横綱、大関以上に、大歓声、大拍手を浴びたのが、紀の川市出身、私の粉河高の後輩の千代雷山。なんと37才の大ベテランで、幕下力士。九重部屋では、ちゃんこ長や若い衆のおつかりげいの胸を出し、部屋の間取衆はじめ力士達の相談にのる心やさしき兄弟子。この年まで現役でいたからこそ故郷に錦。「千代雷山、がんばらなあかないしょー、なんとか十両に上ってけえー」と地元の声、声。まさに「江戸の大関より土地の三段目」のたとえあり。私もあらためて、ふるさとの大切さを実感。これからも各地の「ふるさと寄席」にもさらに力を入れようと心に誓った。(文福)